



TITLE:

地名の地理學的考察とその一例(完)

AUTHOR(S):

小林, 吾一郎

CITATION:

小林, 吾一郎. 地名の地理學的考察とその一例(完). 地球 1933, 19(1): 42-52

ISSUE DATE:

1933-01-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/184124>

RIGHT:

遅速の目に見える尺度として、神は地球から第二に當るところの軌道に、全天を輝すところの一つの火を點火した。これを我等は『太陽』と稱する。これが晝夜を生ずる理由である。かく

て月(Moon)が自分の軌道を一周して、太陽を追及した時に、月(Month)が出来太陽が自分の軌道を一周した時に、年が出来(P.458, L.3—12)。(完)

地名の地理學的考察とその一例 (完)

小林 吾 一郎

C 地質詞

この部には岩石・土壤といふ様なものを扱いたいと思つてゐるので、地質學が有する界域の總べてを言ふわけではない。岩石といふものは天然そのまゝにしても、その環境の一實在であるのみならず、その重さと強さを表はすものとして、或は永劫不變の思想の表徴に借られてゐる。之は現時の嚴密な科學眼には不適當と見られるかも知れぬが、古人の思想の一端として認めねばならぬ。併し永劫不變といふことを物

質に求め様とすることは現時に於いても極めて困難なことであつて、尙岩磐に代つてもらふ位で結構とせねばならぬ。又岩石は風景の一要素である。之等は人文的資料として鑛物の藏所であり、建築工藝の材料である等の用途と共に、岩石を人の言葉に親近せしめ、延いては地名姓氏などにも多く之を見るわけである。土壤また然りである。凡てそれ宇宙を語らんとすれば天地と呼びかけるではないか。國のニもたしかに土であることは、古事記の神代卷などにも天に

對してクニといつてゐることより考へられることである。クニに就いては別に論ぜねばならぬが、土壤またかく重要な割合を以つてゐるのである。

a 石 及 岩

本地域には石をイハとよませる地名は幸ひに無かつたので、此處にはイシとイハとは漢字で限ることが出来た。まづ石に就いて調べると山地に二十六、平地に二十八あつた。割合に山地に多いのであつて、平地二十八の中にも南筑其他の山麓近くが多いからである。この石にも石橋とか、石垣・石井・立石（自然のものもあるが）など人工的なものがある。それが十三あり、その中立石が入る。その外のは上記のもの一宛の外に、石土井と石釜とがあつた。石釜（早）は石製の釜などの意味でなく、石灰を灼く竈のことであるらしい。その邊は古生層から石灰岩を出してゐるからである。

右の十三の外に皮籠石（三）といふのがあつて

神籠石と言はれてゐる。然りとすれば人工の部類となるが、筆者は之を信じない。その部落名の起原となつたと言ふ石は、里人「コーゴシ殿」と呼び祀る一巨石であつて、雷山・高良山・女山等の香合石と類を異にする。そしてそのコーゴシ殿の手前に「イニシ殿」と呼ぶ巨石がある。イニシは犬石であると思ふ。その形により革籠石、犬石と言つたものが、古來からの巨石崇拜により、それ／＼「ドン」と敬稱し祀り祝る様になつたと思はれる。

浮羽にも川籠石といふのがある皮籠石が山麓であるのに、之は筑水の岸なる平地にある。之も神籠石とは無關係であると思ふ。そこから急に筑水の幅は廣くなる所であつて、川越石とも思へぬことはないが、或は河岸に築く防岸用の石を呼ぶのでないかとも思ふ。肥前に於いて荒籠といふ籠に通ずるかも知れない。併し今の處革籠石と見做して置く。

自然そのまゝを指したもののにも面白いのがあ

る。その形容に於いては前記革籠石・犬石などの如きが一例である。地名と關係ないものをも説けばまた一項を滿すに足るものがあるが、無論茲には略せねばならぬ。

石動(神)は動をナリに當て、里人は石ナイと言ふ。r音の去脱は普通の事であるが、肥前に於ては殊に甚だしく、リは凡べてイと呼び、其反對にイをリといふことが多い。ラ行が母音に代る中でも、このイ韻の反轉が肥前に於ては最も顯著である。この石動はその一例である。朝倉に石成がある。之は別に考へを持つてゐる。

又早良には乙石といふのがある。乙石は音石であらうと思つてゐる。皆この種のものは谷の平原に開くあたりにある様である。乙石・石動は同類でないかと思ふ。或は風により、或は河流による轉落、礫擦、騒音等の事に因つたのではあるまいか。この點に於いては三養基に轉石——コロビシがある。貝方の川下にあつて、河流横谷を切つて尙流れも早い所である。

小石といふのが筑紫郡山口村にある。之は圓礫の河原に見ゆるあたりで、河岸に大きな石を見る爲めにはそれより上流に行かねばならぬ。フィールド外ではあるが、小石原(朝)——山間の小盆地で、水勢一時衰える——などと共にその河勢乃至は地勢をも表はし得て面白いと思ふ。

之もフィールドを少し外れるが、耳繩山中に溫石といふのがある。石質を言つてゐるのは却つて珍らしいのであるが、三養基の溫石湯(中原村)と等しく溫泉である。溫石が附近に珍らしい石であり、その湯は體に利くと言ふことが特別に呼ばれるに至つたわけであらうと思ふ。

その外早良には白塔・黒塔といふのが並んであるが、丁度其處が古生層と花崗岩の堺に當つてゐるのは偶然でないらしい。黒塔が古生層にあるが、石灰岩を除けばこの古生層は黒味の片岩類である爲め、花崗岩の方が白く見える。

石礫をゴロ(又はゴロタ)と言ふので、人名らしく五郎などと書くことがあると思はれる。筑

紫の山奥に「四郎五郎」といふ所がある。之れは白礫の意でないかと考へられる。

岩は石と同じことであるが、一般に大きい方を言ふ氣分がある。又松浦の岩屋の岩は石炭を指してゐることは、早良石釜の石が石灰岩を指してゐるのと對照する。十四の中四個が平地部であるが、その中でも岩崎(八)岩津(池)岩田(井)は尙丘陵性といへる。岩光(浮)一個が眞の平地にある。之は巨瀬川に沿ふので「岩水」の義と思つてゐる。

かく岩が平地に少くて、石はそれに比し平地によく分布してゐるといふことは、矢張り石といふことが、天然岩石を言ふ場合は小さいものを言ふ傾向あることと、人工を加へたものは岩と言ふよりは石といふ場合——石垣・石塚・石橋等却つて岩橋などといふ場合が少い——が多いことに因ることだと思ふ。

b 砂

之も眞砂などと好感を持つて迎へられる一人

であるが、その泥の如く粘からず汚からざる點その白さ、均一な大きさ等が反ぼす感じであると思ふ。地名には岩石程にはないが左の如きものがある。

砂子(東)砂原(小) = 砂田(小)

砂子はかの虹ノ松原の内側にある——之は松原により海風を避けるばかりでなく、往時そのサンド・バーに抱かれた渦であつた地方が今は稍々排水の面白くない乍らも耕田となつてゐるので作地との關係もある——。さもあるべき適當な地名である。砂原は勘原驛に近い温泉である。砂田はイサゴと呼ぶ唯一のものである。

この砂のことは幾通りもの語があつて地名にも右の外にある。

先づと言ふことがある。之は洲とも通ずるが、砂の意味として用ひてあると思はれるものに黒須田(東)須田(佐)等がある。

又サコ部で述べた如くサコと言つたと思はれる外に、砂のことをスカといつたことが確か

にある。遠江あたりに於ける防砂の意の「スカ止め」と言ふ語も「砂止め」である。春日（筑・佐・井）横須賀・蜂須賀などのスカも之れであつて、或は洲處と説き、或は城の轉と説くのは當らぬと思ふ。而してスカは石の音にも關係あるものと信じてゐる。スコと言ふのはこのスカと同じものであつて、洲子・洲處などでないと思ふ。須古（杵）津古（筑）などは之れであると思はれる。スキ（城）との關係は後述する。早良の舟底のソコなども疑はれるかも知れないが、未だこの部に加算してゐない。

神崎の諫里の諫も砂のイサでないかと思はれる。イシの轉かも知れない。アシハラ蟹のことをイサ蟹といふのも、石蟹の變つたのかと思ふからである。漁のりを條里の里に代へたとは今の所思はれない。

尙この外に麻那古（小）眞名子（糸）といふのがある。共に前者は二―三百、後者は約四百米前後の山間の小盆谷で、耕田も少しづゝ持つてゐ

る。このマナコといふのは皆山間のみ限つてある地名の様である。山名にあつて日光七山中のは有明である。眞名子の用字に従へば實子の意となるがさう斷ずることは困難であつて、領域分與等の關係から實子の分と、繼子分といふ様な語が起つたにしても、マナコといふ反對のママコといふそれらしいものを見ない。マナコは眞中の轉又は山中の約轉でないかとも思はれるが、筆者はフィールドのマナコに就いて調査旅行を試みしも事情突發して中止したので未だ斷案を下し得ない爲め、今の所では眞砂子の意味と取り、茲に入れて置くことにする。即ち細砂なる山又は谷・原にかく呼ぶことがあることは信じられ得る事ではある。

c 土

1. 土又は土地といふまゝのものは左の如きものである。

黒土原（佐）白土（三）＝土元（杵）黒土（瀨）黒土

（八）浮地（浮）入地（朝）

右の黒土原は、程近く花崗岩地の白・褐・赤の土地が續くに、此のあたりから古生層があつて黒味がちな土壤である。八女郡の黒土も、東方の山地は花崗岩其他から成るが、北東以北は古生界である。その所在地そのものは沖積である。三潞のも人形原の古生層間の沖積土の上にあつて黒い筈である。之等に比して白土(三)はペグマタイト其他長石に富み且つ酸化鐵を含み白色の花崗岩質丘陵にある。興味ある對稱である。かく土地の色―その性質を窺ひ得る―といふことは、よく地名に表はれてゐることは注意に價する。尙ほ外にも「土」・「地」といふ語でなくとも、黒田・黒原・赤坂・赤隈・白坂・白山等の形式で表はれてゐるのである。

浮地は耳繩山麓から巨勢川に至る途中であるが、一般に沼澤狀をなしてゐた時代があつたと思はれる。浮は浮^{ウキ}土^キ即ち固まらない泥濘である。堅田などいふものの反對である。之等も土壤が地名と交渉する一端であらねばならぬ。

入地は前に入の項で述べた様な所であつて、地は直ちに土壤といふわけでないが、土地といふ意味として茲に記して置く。これと等しいものに土地・揚地といふのがあるが之は農業の段で記述する。

2. 埴 土

之は古來埴輪その他土器の製造資料であつた爲、土壤中人類とは特殊の關係があつたのみならず、土師などの職制あつたことは、尙姓氏、地名に交渉して來たのである。土生―ハニフ・ハンブ・ハブ、土師―ハニシ・ハジなどは各地にあるものである。

本地域に於いては筆者の淺見か不幸にして前者は見出さなかつたが、姓氏には時に見受ける所では、或は古字^{コジ}としてあるかも知れない。後者の土師は姓職の部に述べる。

ハニの轉と思はれるものに「羽」といふ文字がある。例へば早良の羽根戸がある。此處は埴輪を出したことは史學雜誌にも記されたことがあ

る。ハネがハニの轉であることは東京市外赤羽に等しいものである。故に羽根戸は埴處と思はれる。尙羽根は姓氏にも、古字、方域名にもよく聞く所である。ニ↓ネは、イ韻よりも弱い發音の場合は、エ韻の方が氣樂な所から轉じ易いことであると思ふ。半田(東)飯田(フイールド)にはこの讀み方はない)なども、ハンダは埴田と思はれるが尙「治」^{ハル}との關係を畑の部で述べ様と思ふ。

三井の鰐口のワニもハニの轉と見做して置く強いて疑へば雁喰(山)のハミもハニと關係を有するかも知れない。

ハネのハガ、カ、ハ相通、喉内相同により「カ」となつたと思ふことは可能である、地名に於ける。「金」カネは、之が相當にあることと思ふ。「金」には鑛産なる金屬であるものはあらねばならぬが、本地域は本來埋藏鑛物に乏しい地域である爲め、金屬なるカネはあまり信ぜべきでない。一應「カネ」を擧げると左の通りである。

埋金(筑)金武(早)小金丸、金原(糸)金立(佐)金丸(三)金田(小)兼木・金屋町・鐘ヶ江(藩)兼松(八)金嶋・彼坪・金丸(井)金本(浮)金川・金丸(朝)

右の中金屋町は「金」字そのまゝに取れるが、他は殆んどハニと疑へるものと思ふ。鐘は幾分飾る氣があると見なされる。金丸の如きはフイールド内に止まらず、少からぬ地名であるが、フイールドに於ける状態から察すると、埴土村(丸は村と考へてゐる、詳細は人文の部で述べらる)と見られる。三養基のは殊に花崗質赫土からなる赤い低丘の北麓に添ふ部落である。埋金の如きも字義に據るべきものでない。ウメ埴土である。金武・金原・兼松等皆然りであると思ふ。金立はキンリフと音讀もするが、本來はカナタテであつて、花立山(朝)などとも通ずるものと思はれる。山名の部で又詳述することにする。

「埴土」の分布は黄褐土との關係から、新しい沖積地には少い。山丘から遠い所には少いといふ傾が見える。

3. クリ・クル・クロ

前に土壤に就いて述べたが、黒い土は、殊に水中の黒土はクリといふので茲に又述べる。

クリは栗・庫裏・廓(區劃)畦といふ様な他の言葉が多いので、調査に骨を折る。まづ栗田(井)はこのクリと思ふ。黒字を用ひるものでは、黒津などは明瞭であると思ふ。佐賀の九郎はその水上に黒土原があるので、黒又は涅の轉であると思ふ。

4. マス

之は増・益・政などの字を用ひられてゐるものであるから、今までの所單に好字としてのみ取扱はれてゐた。確かに好字ではあるが筆者は之等の大部には、他の語から轉じて來た「マス」といふ音に當てられたのがあると信ずるのである。今まで只御目出度く壽ぐが爲め、嘉字を地名の起る時に使つたといふのは割合に少いと思ふ。好字地名が、二字乃至は三字で纏つた嘉き意にならないことは、その一體であると思ふ。多く

は當字をする時好字を探り來つて用ひたと思はれる。好字地名が山地と平地とに於いて特色あることは筆者が今回取扱はうとしてゐる一つであるが、そこには好字本來の意味が探れる様な氣がするのである。

先づマスの原義を論ずる前に、フィールドのそれを舉げると左の如きものがある。

合政・萬壽(筑)＝増田(佐)徳益・正行(山)増永(八)福益・益永(浮)

右の中平地部のものにも浮羽の二個は山麓にある。即ち山近い所の方が割合に多いことになる。そして其等から考へるとマスはマツホの轉のマスウが約されたのであらうと考へてゐる。筑・浮の各二個の外に、増永も之に當ると思ふことが出来るが、他も同律に處することは出来まいか。例へば増田は即ちマソホ田の様である。

土の色により赤坂赤隈と呼び、黄褐土のハニが姓氏地名に成ることから考へて、赭土即ちマ

ソホが地名に採られることは不自然でもなく、有り得べき事である。併しながらマソホなる原語が呼びづらく、爲めにマスと容易に訛つて行つたものと思はれる。花崗岩地を最も廣く有する地域としては、一層妥當と思惟するのである。

このマスが松と相交渉してゐる様である。或は却つてマツは赭土によく生立ち得る所から、マスのホの意味でなかつたかとさへ考へられるのである。松永・松田といふ様なものの中にはマスから來たものがあることと思はれる。

5. ソネ

ソネに就いては二説ある。一は古事記顯宗の段に「淺茅原小谷をすぎて百傳ふ鐸^{タテ}揺らぐもよ置目くらしも」とあるのが、紀には「あさちはら、鳴贈^{ナツケ}禰」とあることから、ソネは谷であるといふのである。訓蒙字會に溪のことをシネイといふとあり、現鮮でも尙然りであることにより、ソネは鮮のシネイであると考えられるのである。但し *sinai* が純粹の鮮語であるか如何かは疑は

しく、或は漢字の韓音とも思はれて、*sinai* は内^{ナイ}かも計られぬ。併らばシに谷の意があるのでないかと思はれる。日本に於いても山谷には「會」の地名は多いのである。

併しながらこのソネの分布を見ると「谷」といふ條件は明らかに認むることは出来ないのである。縦し紀のヲソネをヲ谷の意であつたにしても、今の地名にあるソネは谷と思はれるものは少いのである。フィールド外になるが曾根田（朝）のみは谷にあるが、其とても近くに平牟田といふのがあつて、共に不毛地を示してゐる點から考へて、却つてこのソネには不毛といふ條件に關係あるものと思はれる位である。この考は他の一説たる從來の一般の考へである。即ち含礫土の瘠地であるといふのである。言海子は之を採り、土佐の大埴・小埴・陸前の大埴・小埴の村名あるを擧げてゐる。その「石雜りの瘠地」といふのは埴字による解釋と思はれるが、埴・埴の文字をその土地にソネに用ひた點から考へ

れば、不毛瘠土たる思想を否定することは出来ぬが、直ちに「ソネ」と埒・埒の意と原^{モト}から等しかつたと斷ずることは出来ぬ。

碓の説完くは據るべからず、シネイの説また分布上安信すべからずとすれば、如何なる考であるかと言へば、筆者は左の如きフィールドの曾根から斯く考へるのである。

曾根原(早)＝曾根・曾根ケ里(神)曾根崎(三)

敘上に示した如くハニ・マソホ・赤等の如き土壌の色殊に赭色が地名によく採られる様に、之も同類でソホニ(赭土)の轉約でないかと思ふ。土のニガネに變つた事は前記ハニからハネへのそれと同律であると考へられる。ソホはソオとなつてh音が略され、Soの延韻と近付くであらう。

前掲の通り平地部が多く、曾根原(早)も室見川下流の沖積原中―但し名柄川の水域―なる平地部にある。兎に角フィールドに於いては深い山中にはなかつた。併し平地部といふことにな

つてはゐるが、小丘乃至は基磐との關係は尙ほ認められる所である。

就中曾根崎は「崎」が示す如く、比高も僅かながら―二乃至三米―認められる「尾」といふべき土地の末端にあつて、筑水域の泥濘原に迫るのである。その尾の上は耕土も淺く、纏て基磐なる花崗岩質赭土になつてゐる。赭土^{ソホニ}崎といふことは妥當であると思ふ。又早良の曾根原も、五島山及その西側に連る小丘列と等しき第三期層が基磐をなす所であるが、その第三期層には赭色を帯びた砂岩がある。之もたしかに赭土^{ソホニ}に當ると思ふ。神崎の曾根は大體洪積層から掩はれるが、尙ほ目達原方面から延んで來た基磐―花崗質―は赭土^{ソホニ}である。

かの曾根之松もソホニと松樹との關係を思ふことが出来る、即ち松樹と土質との關係を物語るものと考へたい。

ソネから轉じたと按ぜられるものが二三ある實田(早)などのサネは之れである。花崗岩丘麓

にある聚落である。浮羽の染も疑ふことが出来る。

次は「常」が之であると思つてゐる。この常も好字の類であるが、筆者の行方から考へると一個の當字である。只その當僱する場合に於ける好字たるに過ぎぬ。フイールドの「常」は左の如くである。

常松(筑)＝恒安(佐)常持(井)常用(八)

常にはツメから轉じたものがあらうことは既に述べた。それに當ると思はれるものは、右の中恒安の如きである。常持・常用もその感じがあるが、尙ソネとも案ぜられるのである。之は尙モチの所で後述する。

併し常松だけはたしかにソネ松であると思ふ

花崗質の赤膚の丘陵を負ふこの地は、松に飾られることが相應しいのである。古來松の岡であつたと思はれる。曾根の松と對照せられる所である。ソネのソガツに代る前にスと訛つた時もあると思ふ。かの長髓彦は長曾根彦であると思はれることを前述した。ソースーツと轉じて行くことは極めて自然であると思ふ。

若しこの赭土説が當らぬ場合、即ち谷の意であるとする場合は、「谷」といふ語よりは却つてヤツ、ヤスと等しく、淺く小さいものでなからねばならぬことを附記して置く。

以下も尙次第に世に問ひたいことを期して本稿を一應結ぶ。(完)